

＜オンライン教学講座「報恩抄」① 参考資料＞

◎世界広布新時代の指針

ここでは、まず、報恩そのものについて考えていきたい。

報恩という概念は古今東西を問わず、人間性に深く根ざして、民衆の生活の中に溶け込んできました。本抄で説話や史実を引かれている通りです。

現在の日本においては、ともすれば、報恩というと封建的な主従関係が想起されますが、それは「恩」の一側面から生ずる誤解です。

経典における「報恩」の原語は、サンスクリット（古代インドの文語）の「クリタ・ジュニヤー」だと考えられています。「なされたこと」（クリタ）を「知る」（ジュニヤー）という意味です。

今の自分があるのは、多くの人々のおかげであることを知り、感謝の心を持って、今度は自分が人々のために尽くしていく。この行為こそが、「知恩」であり「報恩」であると言えるのではないでしょうか。

報恩は、人間性の証明です。そのうえで仏法における報恩とは、主君や両親という特定の人に限定的に向けられるものではありません。知恩報恩の人生は、そのまま、「一切衆生への報恩」に通じていくのです。

（『世界広布新時代の指針』90 ページ）

◎世界広布新時代の指針

大聖人も、父母や師匠、国主の意に背いてまで、さらには妙法を弘通されるがゆえの大難をも覺悟して、求道を重ねられました。

「報恩抄」の後段では、「今度命をおしむならば・いつの世にか仏になるべき、又何なる世にか父母・師匠をも・すくひ奉るべきと・ひとへに・をもひ切りて申し始め」（全321・新251）と綴られています。牧口先生が御書に線を引かれていた一節です。

大聖人ほど、眞の孝養を果たされた方はいません。日蓮仏法の出発点は、どこまでいっても報恩にあります。この原理は、いつの時代も変わりません。それゆえに、青年は、自身の人生の誓願の出発点の第一に親孝行を置いてほしい。親を愛することが、他者を愛することにつながるからです。

うれしいことに、今、多くの創価の青年たちが、この尊い「報恩の人生」を歩んでくれています。至高の精神性に生きる地涌の若人は、学会の宝の人材であり、そして人類の財宝であると、私は確信しています。

（『世界広布新時代の指針』96 ページ）